

インドネシア

飛行場大隊の想い出

大阪府 山口 美 乗

私は大正十一年八月二十三日、大阪の天満天神近くでカットグラス工場を経営している家に生まれ、高等学校卒業後、軍需工場の住友金属桜島工場で兵隊に行くまで勤務していました。昭和十七年徴集兵として滋賀県八日市の第百四教育飛行連隊に入隊した我々現役兵の若干名は、四月二十一日転属を命ぜられ、予備役の召集兵や、四国善通寺師団よりの自動車部隊がこれに加わり、更に北満からの関東軍の精鋭も加えた新編成の部隊の一員となりました。

八日市の宮庭の満開の桜の木の下で開隊式が行われたのは四月二十六日でした。原武四郎部隊長が「今日のこの桜の花を見ておけ」と言われたのを今でも覚えていいます。桜のごとく散れとも、これが日本の見納め

だという意味にもとれ感無量でありました。我が部隊名は第百十九飛行場大隊で、私は補給中隊、資材小隊配属を命ぜられ、中隊長鈴木茂内大尉、小隊長松島重男中尉のもとで二年間、決戦段階の南太平洋、赤道直下のハルマヘラ島、インドネシア北セレベス島で戦い、かつ敗戦後の抑留生活をも体験してまいりました。

開隊式の翌日、部隊は早くも八日市を出発するという慌ただしさです。私は停車場衛兵を命ぜられ、完全軍装で一足先に衛門を出ました。一月十五日、浜松の教育隊から転属以来、一度の外出もなく、出発の前日の夕、点呼で「明日は外出」と突然許可され、これが最後の機会と思われたのであります。

母に電話をして、時計、万年筆、チェリー（煙草）五十箱など欲しいと手短かに話をしました。私は今度は列車衛兵ですから車両の乗降口に銃を持って立っているだけなのです。大阪の家の方では、御飯を炊いたり、小豆を煮たり、おはぎを作ったり、寿司を巻いたりして弟妹や祖母までが、夕方から夜中まで、大阪駅のホームに待っていたそうですが、我々の軍用列車は

吹田から貨物線に入り、せつかくの面会作戦はあつけない幕切れとなつてしまいました。

昭和十九年四月三十日薄暮、門司を出港、船団は護衛艦を含め三十余隻の堂々たる船団で、私の船は七千トングラスの貨客船「建和丸」、輸送指揮官は原部隊長でした。高雄を出てバシー海峡にかかると、早くも敵潜水艦の雷撃により数隻が犠牲となりました。我々のすぐ目の前で駆潜艇がやられたのですが、魚雷命中の水柱が消えたころ、艦影もかき消すがごとく波間に飲まれてしまい、はかない緒戦でありました。

マニラ寄港後、セブ海に入り敵の夜襲を受けました。本船のすぐ隣を航行していたタンカーに魚雷が命中すると同時に、紅蓮の焰を吹き上げ、辺りは真昼のように赤々と照らし出され、海上に吹きこぼれた油が黒煙を上げ燃え盛る。その炎の海へ船員が、二人三人と飛び込んでゐる。私たちは、ただ声を飲んで見守るばかりでした。地獄絵そのままの悲惨な光景で、我々もいつ同じ運命になるかと思いつつの航行が続けられました。

船団はさらに南下を続け、モルッカ海峡に向かうと赤道付近の海は青畳を敷き詰めたような穏やかさで、今日はハルマヘラへ入港という朝、「建和丸」も船首に魚雷が命中。たしか五月二十五日午前七時過ぎかと記憶します。私は二番船倉上の甲板で朝食の乾パンを分配中でした。「〇時方向雷跡！」との見張りの叫び声で顔を上げると、はや百メートルほどの向こうの水下面下を、白い魚雷の航跡が三条、本船に向かって突っ込んで来るところでした。タンタンタン、タンタンタンと、魚雷の信管を狙う機関砲の砲声が船後尾から聞こえてきます。

グワーン！ 足元から湧き起こった爆発音に一瞬体が宙に浮いた感じがして、すーっと薄暗く感じた瞬間、巨大な水の壁が天井から、ドーンと覆い被さってきました。私はしばらく息もつけず、「もうおしまいだ、このまま船と一緒に海底へ沈むのか」と一瞬観念いたしました。フツと気がつくくと頭上に青空が戻り、船も進んでいるようです。しかし、今までは舷側から海面まで七、八メートルもあったのが三、四メートルと

なり、船尾が海面から浮き上がったのか、ガラガラとスクリュウの空転する音が響き伝わってきていました。

「筏を落としてやれ」の声で竹で作った筏が落される。後方を見ると雷撃のはずみで振り落されたのか、いち早く飛び込んだのか、幾つもの頭が波間に見え隠れしながら遠ざかってゆきました。私も、飛び込むか、どうしようかと躊躇していますと、「本船は大丈夫だ、落ち着いて行動するように」と力強い部隊長の大声が聞こえてきました。

船首には四〜五メートルもの穴が口を開け、一、二番船倉のドラム缶のガソリンにも引火せず、天佑神助とは正にこのことかと思いました。本船のスピードは落ちましたが、二本目の魚雷は機関部の真下をくぐり抜けていったそうで、轟沈を免れたと聞きました。我が部隊は戦死二、負傷十数名という損害で残念でしたが、船舶砲兵隊の損害は大きかったようだし、沈没船舶の犠牲はさらに大であったと想像されました。

命からがら着いたハルマヘラ島で、我が部隊はヘヤホール地区の海岸に文字通りの野営をしながら、二十

四時間交代制で、胸まで水に漬かりながら兵器、弾薬、食糧の陸揚げ作業に従事し、さらにこれらを担いで集積所に運ぶ毎日でした。水が悪く、疲労と栄養失調で皆すごい下痢に悩まされましたが、初めて見る夜空の星の美しさは今日でも忘れられません。

ニューギニア作戦が中止となり、私たちはセレベスの海軍部隊と交代し、守備する命を受けセレベス島に移駐となりました。インドネシア人の日本に対する感情は良く、軍に協力をしてくれていました。

アムラン飛行場近くのタワンの兵舎にいたのは月中ごろから下旬ころではなかったでしょうか。飛行場は九分通り完成し、旧式の蒸気ロードローラーで、千名近いインドネシア労役者が作業をしていました。

兵舎はニッパハウスで、当面陣地構築、道路整備、器材調整が業務です。陸軍の航空隊には二つの野戦部隊があります。その一つは花形の飛行戦隊、作戦地域の飛行場に進出していて、そこを基地として敵陣を攻撃する。もう一つは、飛行場に駐屯しこれを守備し、戦隊に弾薬、燃料を補給し、兵員の給与を担当する飛

行場中隊、飛行場大隊といったものでありません。

私は飛行兵、機関工手であったので、燃料分隊に所属し、ピスト勤務について、友軍機の着陸を誘導したり、進発機のエンジン始動を手伝ったり、タンクローリーに乗ってガソリンを補給して回ったりするのが任務でありました。

アムラン飛行場は、方面軍の北セレベス地区の最重要秘匿飛行場であったようです。メナドの南東七、八〇キロの所、アムラン湾の南海岸の椰子林を切り開いて設営されたもので、滑走路は幅百メートル、長さ千五百メートルくらいその中程から誘導路が内陸部に向かって延び、所々に赤土を盛り上げたり、山裾の斜面を切り込んで掩体壕があり、これを格納庫代わりに使っていました。

連合軍の偵察飛行は昼間高々度を飛び写真撮影などしていると考えられ、夜は海岸線を飛行艇が三百〜五百メートルくらいの低空で哨戒しており、連日決まった時間に、決まったコースを飛んできていました。敵はこれにより海上封鎖や写真撮影により襲撃の機を窺っ

ていたと思われます。初空襲は、飛行場完成直後の八月二十三日であったと記憶しています。

この日、私はポスト勤務についていましたが、ただならぬ爆音に滑走路へ飛び出して見ますと、縦一列にならんだ四機の爆撃機が十数機、三千メートルくらいの高度で侵入してきました。尾翼の両側に二枚の垂直安定板が見えるのでコンソリデーデットB24だろうと思ったとき、銀色の機体から鼠の糞のような黒い粒がバラバラと落ちてくるのが見えたので、あわてて防空壕に飛び込みました。

私を追いかけるようにザーッと椰子の実が落ちるような音がして、ズシーン！ズシーン！と腸はらわたに響く振動と、息の詰まるような爆風にバラバラと全身に土が崩れ降り注いできます。ピシッピシッと閃光が飛び込み、ダダダダッと発射音が後から追って聞こえます。

鼻を突く硝煙と青臭い匂いが混じり合った煙霧が流れ込んできた。爆音が遠ざかって行きました。至近弾に見舞われた防空壕の入口は、七〜八〇センチもあっ

たものが、体が通りにくいほど狭まくなっているのに驚かされました。壕を出て眺めて見ると、滑走路には直径十数メートルの穴がポカッ、ポカッと開いていて、穴の底から地下水が湧きでております。椰子林の上部は吹っ飛んで幹ばかり、ニョキニョキと突っ立っている無惨な光景が目に入りました。

この日を境に米豪連合軍の攻撃は熾烈を極め、連日定期便のごとくやって来る。B 24の水平爆撃、ビューハイターによる落下傘爆弾攻撃、グラマン艦上戦闘機の機銃掃射などに毎日さらされました。夜間には翼端灯をつけた偵察機が上空をグルグル回って、時には爆弾を落としていく。

プリュスタービューハイター襲撃は、飛行場背後の小山すれすれに機銃掃射しながら侵入し、落下傘爆弾を落としていく。私は小高い山上で遭遇したのですが、飛行機の方が私より低い所を飛んでいく、色鮮やかなマフラーを風になびかせ、身を乗り出して戦果を確認しているパイロットの顔がすぐそこに見え、石でもぶつけたら当たりそうな超低空飛行でした。

この小山には我が軍の機関砲陣地があり、連日激闘を繰り返しておりましたが、我が機関砲隊は実に勇敢で、戦後オーストラリア軍から特別に調査にきたほど多くの敵機を撃墜しておりました。この隊長波多野英次郎中尉は私と同年でしたが、部下の信望を一身に集めた戦略家でした。犠牲を少なくし、敵に無駄弾を使わせる擬装陣地などを作っていました。

このような状況下、敵襲の間隙を縫うように爆弾の穴埋めをしながら、我が九九式重戦闘機によるモロタイ島攻撃などが実施されました。攻撃は主として薄暮、払暁攻撃と、敵艦船の防空砲火の弱点について行われ、夜間の離着陸には電気設備がないため、椰子油のカンテラを限界灯に、滑走路の西側にならべて、敵襲を警戒しながら攻撃機を送り出し、また迎え入れたのも懐かしい思い出です。

その年の暮れ近く、私は虫垂炎で入院する羽目になりました。野戦病院が遠い所にあっただうえ、途中の橋や道路が爆撃で寸断されていたため、既に手遅れになっていましたが、天の助けか四十数日入院し原隊復帰が

かないました。私が入院中のころ、敵機動部隊が大挙しセレベス方面に向かっているとの情報があり、もし上陸して来たときには「生きて虜囚の辱めを受けないように」動けない患者は、注射で安楽死させ、動ける者は総て原隊に帰すとの噂が流れ、まことに心細い極みでありました。

その病院で大阪出身の船舶工兵の南中上等兵が入院されており、爆弾の破片創から肺が化膿する病状でしたが、「山口こんな所で体力を失ったらもうおしまいだ、食え、食え、うんと食って体力をつけとかなあかん」と、病院からは出ない沢山の物を食べさせていただき、私の忘れられぬ人でありました。

私は傷口にドレン抜きのがーゼがまだ入っているのに、原隊復帰を命ぜられました。しかし、トモホンの兵站病院からアムランの原隊まで、車で五〜六時間もかかる所を、一人で歩いて帰ることはできません。軍医の好意で、部隊からの自動便があるまで桂部隊本部で待機するよう取り計らってくださいました。四〜五日して井狩班長が兵器受領にこられたトラック便にて

原隊復帰ができました。

復帰して間もなく、昭和二十年三月ころ、ランゴアンに移駐し、第百八飛行場大隊と一緒に中隊の再編成が行われました。当大隊は、昭和十九年二月二十九日浜松の第百五教育飛行連隊で編成されたと聞きました。この部隊には優秀な人材を選りすぐって編成されていたようで、空中勤務出身将校、下士官も多数おられ、現役の飛行兵を中心に編成された中隊も、第百十九大隊では補給中隊と称したのに対し、ここでは整備中隊と呼称し、戦隊の機付兵が追隨できない激戦地でも、機体整備ができるようにということで、機関分隊というものがありません。

ハルマヘラ島からは多くの隊がニューギニアに転進され、ハルマヘラ島ワシレに残留された古川大尉以下二百五十数名は、六月末ワシレを出発、七月一日にセレベス島ビートンに上陸、アパンゲット飛行場に展開、その後、桂兵団と米連合軍上陸には、玉砕作戦を敢行するため、ランゴアンで再編成されました。

当時、ブーゲンビル、ニューギニアをはじめ南太平洋

洋戦線の多くでは、食べる一粒の米もなく、一発の弾丸の補給もなく、飢えと病に苦しみながら、日夜悲惨な戦いを続け死んで行った多くの戦友たちのことを思いますが、最終にはセレベス島で、とにかく飢えることもなく軍務を完遂できたことは運が良かったというより、なにか申し訳がないという気がいたします。

【解説】

○飛行場大(中)隊

昭和十四年空場分離編成によって、飛行部隊から分離独立して創設されたもので、その規模は大隊、中隊とある。

任務は、航空機等の整備、飛行場の整備、資材・燃料・食糧その他の補給、飛行隊員の休養等を担当した部隊である。

昭和十八年以降大改編が行われ、内地及び滿州などにある部隊は整備・警備、その他の地区にある部隊は補給・警備の各中隊編成となり、昭和十九年以降は対空通信・無線通信器材及びその要員が対空通

信隊・航測隊等に転出し、飛行器材整備関係要員と器材は野戦航空廠又は独立警備隊に転出し、逐次に補給・警備・飛行場整備等だけが主任務となった。

○第一一九飛行場大隊の通称号は「勢一八四四〇部隊」で、任地は比島―ハルマヘラーセレベスである。

○第一〇八飛行場大隊の通称号は「輝一五三六四部隊」で、任地は西部ニューギニアである。なお、南西方面所在の飛行場大隊は次のとおりである。(西部ニューギニア、ハルマヘラ、セレベス)

第一〇七飛行場大隊「輝一五三六三部隊」

内地―ハルマヘラーセレベス

第一〇九飛行場大隊「輝一五三六五部隊」

内地―ハルマヘラーセレベス―一部パレンバン

第一一三飛行場大隊「襲一一八〇三部隊」

ハルマヘラーニューギニア

第一一七飛行場大隊「輝一八四三八部隊」

内地―濠北―セレベス

第一二〇飛行場大隊「勢一八四四一部隊」

ハルマヘラ

第一二二飛行場大隊「真一八四四三部隊」

ハルマヘラ

ハルマヘラーセレベス

第二七飛行場中隊「輝一一八〇〇部隊」

ハルマヘラ

飛行場設定隊ハルマヘラ所在部隊

第一九野戦飛行場設定隊（勢一五三三三）

第一〇四野戦飛行場設定隊（勢一五三三九）

第三六飛行場中隊「襲一五三四五部隊」

ニューギニアバボ

第一〇八野戦飛行場設定隊（勢一五三三三）

第一一六野戦飛行場設定隊（輝一〇八〇六）

第三九飛行場中隊「輝一五三四六部隊」

ハルマヘラ

第二二〇野戦飛行場設定隊（輝一〇九二四）

第二二三野戦飛行場設定隊（輝一五三八七）

第四〇飛行場中隊「輝一五三四七部隊」

アンボイナ（西ニューギニア）

第二二四野戦飛行場設定隊（輝一五三八八）

第四二飛行場中隊「襲一五三六九部隊」

ハルマヘラ

○桂兵団について

独立混成第五十七旅団、南方軍、第二軍

第四四飛行場中隊「襲一五三七二部隊」

ハルマヘラ

昭和十九年六月二十一日、軍令陸甲第六十二号に

第四五飛行場中隊「勢一五三七二部隊」

ハルマヘラ

依り、独立混成第五十七旅団の編成下令、同年八月二十五日、既にメナドに到着してある基幹人員をもつて旅団司令部の編成を完結す。

第四六飛行場中隊「輝一五三七三部隊」

ハルマヘラ

旅団長 陸軍少将 遠藤新一

旅団編成要員は「メキシコ丸」「ハーブル丸」に

第七二飛行場大隊「輝一一八〇六部隊」

乗船、「セレベス」に向かい、航行中「ハーブル丸」

は機関故障により「ホロ島」に滞留、「メキシコ丸」の目的地地へ向かう。途中、八月二十九日二時五十分ころ、「セレベス海」北緯二度十九分、東経百二十二度十九分付近において、敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、八四名戦死す。救助せらるる兵員は八月三十一日「メナド」に上陸し、直ちに編制に着手す。旅団長は在「メナド」部隊を指揮し「メナド地区」の警備を命ぜらる。

九月八日、隷下部隊の編成を完結。

独立歩兵第三七二大隊長 陸軍少佐 相良広遠

独立歩兵第三七三大隊長 陸軍少佐 中村武次

独立歩兵第三七五大隊長 陸軍少佐 岩本貢

独立歩兵第三七七大隊長 陸軍少佐 高延隆雄

以下 約二千名

欠如部隊

独立歩兵第三七四大隊

独立歩兵第三七六大隊

旅団砲兵隊、同工兵隊、同通信隊

昭和十九年九月十四日 旅団通信隊編成完結

旅団通信隊長 陸軍中尉 田村一夫

以下 約百名

九月二十二日「タラウド」守備隊長を旅団長の指揮下に入らしむ。

十月十五日、独立歩兵第三七四大隊、同三七六大隊は「ボルネオ」守備軍に転属せしめらる。

十一月十三日 桂臨時工兵隊を編成。

金田大尉を長とする台湾勤労団主体の約七百名。

十一月二十五日 北部「セレベス」地区海軍指揮官を陸上直接防衛に関し指揮下に入らしめらる。

昭和二十年四月三十日、第二方面軍野戦貨物廠、野

戦兵器廠、野戦自動車廠の「メナド」地区各支廠

を旅団司令部に転属せしめらる。以上 約三百名。

五月十二日、旅団配置を変更し左の部隊（松号部隊と呼称）に南部「セレベス」に転進を命ず。

独立歩兵第三七七大隊、独立歩兵第三七二大隊の一

中隊、第二方面軍特設第六機関砲隊、

独立守備歩兵第二十二大隊の二中隊、

独立有線第一〇〇中隊の一小隊、

独立自動車第二九〇中隊の一小隊

以上 約二千名

五月十二日、「タラウド」「サンキヘ」守備隊を北部

「セレベス」に移駐を命ず。

六月二十一日、第二方面軍司令官の指揮下に入る。

六月二十一日、第二方面軍司令官より、旅団主力は

速やかに西南部「セレベス」に前進を命ぜらる。

七月十日、旅団主力は速やかに西南部「セレベス」

に向かい前進を開始す。

八月一日、甲村参謀は司令部人員約四〇名を指揮し

「シンカン」司令部に先遣を命ぜられ「トモホン」

を出発。

八月十四日、「ボツダム宣言」受諾の大詔拝す。

八月十八日、一切の戦闘行動の停止を命ず。これが

ため西南部「セレベス」に前進部隊は各々前進を

停止す。

八月十九日、西南部「セレベス」前進部隊（松号部

隊を除く）の原駐地復帰を命ず。

八月二十五日、零時を以て旅団はその作戦任務を解

かる。

八月三十一日、甲村参謀一行四〇名「トモホン」帰

還す。

九月十三日、旅団隷下指揮下部隊に対し、武装解除

及び之が返納を命ず。

九月十四日、「メナド」において連合軍と現地交渉

を開始す。

九月十五日、前日に引続き現地交渉。

十月二日、濠州軍「メナド」に上陸。

十月十四日、日本軍集結地を「ビートン」に命ぜら

る。集結行動を開始す。

十月二十九日、日本軍「ビートン」に集結完了。旅

団長は集結地に於ける陸海軍及び邦人全員の指揮

を命ぜらる。

十一月一日、日本人集結地の直接管理の責任を濠軍

より蘭軍に移管せらる。

十一月十五日、南方軍第四通信隊木原隊を旅団司令

部に転属せしめらる。一〇一名。

十一月二十九日、甲村参謀濠州軍に出頭を命ぜられ

「モロタイ」に召喚せらる。

十二月三十日、旅団長濠州軍命令により「モロタイ」に召喚せらる。

十二月三十日、旅団長不在間代理

陸軍大佐 田村多郎

昭和二十一年四月二十三日、末益少佐は司令部人員

四名を指揮し「メナド」港に先遣を命ぜられ「ピートン」集結地出発。

四月二十三日、旅団は復員のため「メナド」港に向

かい前進を開始す。

五月十日、復員船「メナド」港出航。

五月二十日、和歌山県田辺港に入港。

ハルマヘラ第三十二師団

兵隊蟻の遙かな道

茨城県 篠田 市郎

私は近衛歩兵第一連隊歩兵砲中隊に入隊し、連隊砲（四一式山砲）の教育を受けました。昭和十七年は大
学、高専校の理工学部を除く学生の徴兵延期が廃止さ
れたため、空前の入隊ラッシュとなりました。十月、
前橋予備士官学校を卒業し原隊に帰り、第三機関銃中
隊の将校室が居室となりましたが、これは入校と同時に
に機関銃教育と変わったためであります。

私の最初の転属命令は十二月早々で、南方軍速射砲
小隊長としての内命を受けましたが、私を含めて四名
が速射砲の未教育者でした。出発までの短い期間でも
と、猛特訓を受け終了した夜、腹痛となり翌日入院、
手術を受けましたが、盲腸炎の手遅れで腹膜炎も併発
し、一命は取り止めたものの、胸部疾患の熱も出て転